

啓蒙と「半アジア」 - カール・エーミール・フランツォース試論(1)

伊 狩 裕

1

少年マネス・シュペルバーが「奇妙に複雑で切ない気持ち」¹⁾を抱いていた年上の女性レアは、少年にこう言って町を去ってゆく。「大きくなったら、あなたにもわかるわ。大きくなったらね。私、町を出るから。もう帰ってこないの。私がいってしまったら、わたしのことを怒るのをやめてね。いつかあなたが本を書くようになったら、たとえばカール・エーミール・フランツォースのようになったら、そのときはわたしを思いだしてちょうだい。でもレアとは呼ばないで。ロツテと呼んで。ロツテと。」²⁾

舞台はオーストリア帝国ガリツィア・ロドメリア王国の東端、ブコヴィナ公国に近いザプロトフ³⁾という町のユダヤ人ゲットーである。シュペルバーがこの町に暮らしたのは「人生の最初の十年」⁴⁾であった。この挿話はフランツォース没後10年たった1914年のことであるという。ところがシュペルバーはこの挿話に続けて、「このエピソードは、忘却のなかから掘り起こしたものではなく、書いているうちに頭のなかでできあがっていったものかもしれない」とし、ゲーテの『ヴェルテル』にあやかってロツテと呼ばれたがっていたこのレアという女性も幾人かの女性たちの「モンタージュ」⁵⁾である、とその記憶ははなはだ心許ない。とすればそこで言及された作家の名前も「カール・エーミール・フランツォース」であったかどうかもさだかではない。しかし、当時のガリツィアを呼び起こすには、その後は忘れ去られた作家のほうにより効果的だった。フレッド・ソマーは、フランツォースの名が知られていたのは「1875年から1935年まで」⁶⁾と限定している。フランツォース

は、1874年に、のちに『半アジアより』(Aus Halb-Asien. 1876)にまとめられるシリーズの連載を「ノイエ・フライエ・プレッセ」⁷⁾誌上で開始し、作家としての人生を歩み始め、1904年、反ユダヤ主義的な風潮の高まるなかで、遺作となった『道化師』(Der Pojaz. 1905)の出版社を見出すことができないまま、56歳で世を去る。ソマーの挙げる1935年という年は、いわゆるニルンベルク法が成立し、ドイツで反ユダヤ主義が合法化された年にあたる。その後のナチス支配の拡大と強化のなかで、フランツォースの主な作品の舞台となったガリツィアのユダヤ人世界も壊滅し、第二次大戦後もその名は復活することはなく、「今日まだカール・エーミール・フランツォースを覚えている人間にはよほど特殊な理由があるに違いない。この名前は多くの文学研究者たちにも、もうなにも思い起こさせない」⁸⁾といわれるまで完全に忘却された。

シュベルバーの回想と並んで、19世紀末から20世紀の初頭におけるフランツォースの知名度を示すもう一つの例は、フリッツ・マウトナーの、1897年に出版されたパロディー集『有名なお手本に倣って』⁹⁾であろう。ここでマウトナーは、22名の作家のパロディーを試みているがフランツォースもそこで名を騙られた一人である。パロディーは本歌の著名が前提となる。その中には、グスターフ・フライターク、パウル・ハイゼ、ザッハー=マゾッホ、リヒャルト・ヴァーグナー、ヴィクトル・ユゴーら今日でも「有名な」名もあるが、ゲオルク・エーバース、ハンス・ホプフェン、ヨハネス・シェルなど、「よほど特殊な理由がある」者しか知らないであろう名前の方がむしろ多い。マウトナーのパロディーに映し出された19世紀末の読書界は、今日の文学史が提示するのとはおおよそ異なった様相を呈していたのである。

シュベルバーの故郷ザプロトフから北におよそ90Km、ロシア国境が20Kmにせまるチョルトコフ¹⁰⁾がフランツォースの故郷である。ザプロトフ同様、チョルトコフもポーランド人、ルテニア人¹¹⁾、ユダヤ人が混住する東ガリツィアの町で、今日ではウクライナに属している。1896年の住民調査¹²⁾は、チョルトコフの人口を5099人、うちローマ・カトリック教徒1302人、ギリシャ・カトリック教徒601人、ユダヤ教徒は3146人、その他50人と記録している。すなわち6割以上がユダヤ人であり、ポーランド人は全住民の約26%、

そしてルテニア人がその半分弱の約12%という民族構成になる。ところが日常言語は、ポーランド語4206人(約82%)、ルテニア語660人(約13%)、ドイツ語131人(約3%)、その他17人であった。町の人口の6割以上を占めたユダヤ人たちは、当時彼らが日常用いていたイディッシュ語を申告することは許されず¹³⁾、この日常言語の統計においても、ユダヤ人のほとんどがポーランド語を、そして100人あまりがドイツ語を回答したのである。

カール・エーミール・フランツォースが生まれたのは、この住民調査が行われるおよそ半世紀前の1848年であった。その当時のチョルトコフは1896年の住民調査時より一回り小さい。1853年に出版されたストゥブニツキの案内書『ガリツィア・ロドメリア王国』は、チョルトコフについて、「レンベルクから15番目の宿場。住民3500人。君主の新旧の城館とドミニカ派修道院のほかには見るべきものはなにもない」¹⁴⁾とわずか4行しか記述していない。「君主の新旧の城館とドミニカ派修道院」とは当時、ガリツィアの実権を握っていたポーランド貴族と聖職者を象徴するものである。このドミニカ派の修道院の中には、「町で唯一の学校」¹⁵⁾があり、フランツォースもそこに通い、ポーランド語とラテン語を学んだ。フランツォースは同化ユダヤ人の3代目として、管区医師の家庭に生まれ、父親から「おまえは民族(Nationalität)としてはポーランド人でもないルテニア人でもなく、ユダヤ人でもない。おまえはドイツ人なのだ」と同時に「信仰からしておまえはユダヤ人なのだ」¹⁶⁾と言われて育った。父自身が祖父にそのように育てられたのであった。

『私の処女作「バルノフのユダヤ人」』(Mein Erstlingswerk: "Die Juden von Barnow")のなかでフランツォースは自分の家系に触れている¹⁷⁾。それによると祖先はスペイン系ユダヤ人であった。異端審問の迫害を逃れオランダを経てフランスに定住しルヴェール姓を名乗り、蠟燭工場を経営した。1770年、曾祖父の代に一家はポーランドに移住する。タルノポルの蠟燭工場を受け継いだのがフランツォースの祖父であった。その2年後、1772年の第1次ポーランド分割によって、タルノボルを含むガリツィアはオーストリア領となる。¹⁸⁾祖父が姓をルヴェールからフランツォースに改めたのは1787年のことであった。この年の7月、オーストリア皇帝ヨーゼフ2世は、「家族が一定の姓を

もたず、個人が余所でも通用する名前をもたない場合、ある人間集団の政治上また司法上の手続き、および私生活において生じるあらゆる混乱を避けるために、全世襲領のユダヤ人に対して、「遅くとも11月末日までに」ドイツ語風の氏名に創氏改名するよう勅令¹⁹⁾を発したのであった。フランスから来たという理由からであろう、祖父は軍当局から「フランツォース」という姓を与えられた。1784年にヨーゼフ2世はレンベルクにドイツ語大学を創設し、1789年、ハプスブルク領邦のなかでは、もっとも遅れてガリツィアにも寛容令が公布され、ユダヤ人にも高等教育を受ける道が開かれると、それを待ちかねていたように、翌1790年に祖父は家族を残し、仕事を他人の手に委ね、レンベルク大学に入学し、ドイツ語、歴史、法学、美学を学び、メンデルスゾーン、レッシング、シラーに深く傾倒してゆく。啓蒙主義のまっただ中であつた。『賢者ナータン』(1779年)は、民族も宗教も超えたところにある「人間」を啓示していた。「私たちは自分たちの民族なのですか？ 民族とはいったい何なのでしょう。キリスト教徒とユダヤ教徒は人間である前にキリスト教徒とユダヤ教徒なのですか。ああ、人間と呼ぶだけで十分なもう一人の人間をあなたの中に見いだせていたら」²⁰⁾というナータンの言葉に、代々スペイン、オランダ、フランス、ポーランド、オーストリアと異民族・異教徒の中を流浪してきた家系の祖父が、中世以来のユダヤ人差別からの解放の道標を見たことは容易に想像できる。ジョージ・L・モッセによれば、啓蒙主義を支え、啓蒙主義に欠くことのできないものがヘルダー、ゲーテ、シラー、フンボルトの「教養」(Bildung)であつた。「その目的は、個人を迷妄から解き放ち、啓発に導くことであつた。〈教養〉と啓蒙主義は、ユダヤ人の解放期に手をたずさえ、両者はお互いを補いあうもの」²¹⁾となり、「古典主義的〈教養〉の概念は、解放後のユダヤ人のアイデンティティをほとんど決定し」²²⁾、「多くのユダヤ人にとり、〈教養〉の概念は、ユダヤ性をあらわす言葉になった」²³⁾のである。同化ユダヤ人にとっては「民族」は禁句であり、彼らの「入欧」の成就のためには互いが「人間と呼ぶだけで十分」な、すなわち民族と宗教という迷妄から解き放たれた存在となる必要があつた。人間のうちには生まれながら「人間と呼ぶだけで十分なもう一人の人間」が胚胎しているはずであり、「教養」を通じて人はそのような普遍的な人間に到達でき

るはずであった。「この理想を追う者は、自分は教育を終えて完成した人間であるとは考えず、つねに成長の途上にあるものと見たのである。ここにはたしかにユダヤ人同化のためにまことに都合のよい理想があった。なぜならそれは、個人の人格の開花をとおして、民族性と宗教のあらゆる相違を超越するものであったから」²⁴⁾である。モッセは、このような同化ユダヤ人のアイデンティティとなった啓蒙主義と教養の理念に「独特の楽観性」²⁵⁾が潜んでいたことも見落としてはいない。このとき啓蒙主義と教養を通じてドイツ文化に同化したユダヤ人たちの子孫は、現実のドイツがどのように変質しようとする理想のドイツを観念の中に抱き続け、アウシュヴィッツ以後も自らのアイデンティティを救済するためには、「ゲーテとベートーベンが本当のドイツであり、ヒトラーはほんの突発的な出来事にすぎなかったのだ」²⁶⁾といわざるを得なくなるのである。神話からの解放をめざした啓蒙主義が新たに「ドイツ」という神話を生み出し、啓蒙主義は神話と化してゆくのである。

フランツォースの祖父はモッセが描き出した初期の同化ユダヤ人の典型であった。ユダヤ教を信じるオーストリアのドイツ人となり、息子すなわちフランツォースの父ハインリヒにも、「私たちの上にいるのはただ一人の神である。すべての宗教は同じように優れている。すべての宗教は人類に対する責務を持っているからである。儀式はなくてもよいだ。ユダヤ人として生まれたのであるからお前はユダヤ人であり続けなくてはならない。なぜならそれが神の意志であることは明白であるからであり、また怪訝な目で見られているお前の信仰上の同胞には、自分たちを浄め守ってくれる善良で教養ある(gebildet)男たちが必要なのだ」²⁷⁾(傍点引用者)と教え込み、彼がドイツを故郷とすることを望み、ウィーン大学で学ばせる。『パルマのモシュコ』(Moschko von Parma. 1880)でフランツォースは、主人公モシュコの最期を看取る医師の姿に「細部に至るまで私の父」²⁸⁾を描き込んでいる。

彼は、裕福な両親のもとにポドリャで生まれた。そして早くから自らの苦い体験を通して、故郷のユダヤ人を苦しめていた二重の苦しみを味わわれていた。すなわち、信仰に由来する憎悪と狂信であった。というのも彼がドイツ的教養(deutsche Bildung)を身につけようと決心

したとき同胞たちは彼に邪宗徒の烙印を押し、エスコラピオス修道会の神父は彼の故郷の町のギムナージウムに彼を受け入れようとはしなかったからである。だが彼の意志はこうした障害よりも強かった。彼は、ウィーンへ、それからドイツへ行き学業を終えるとミュンヘンで医師として開業した。だが彼の故郷への思いは絶ち難かった。両親への思いと、さらにいっそう強かったのは虐げられている人々を救い、手を差しのべたいという衝動であった。そこで彼は平原の小さな貧しい町を自分の仕事場に選んだのであった。そして彼は病人と健康な人々に対する二つの課題のために毅然として献身したのであった。光のなかをさまよったものが闇になれるのは難しい。だが彼はそれを克服していった。彼が直面した悲惨な状況はいっそう彼を強くした。²⁹⁾

啓蒙主義の精神と教養の理念は家訓としてフランツォースにも受け継がれた。「ドイツの民族感情 (das deutsche Nationalgefühl) はすでに幼少の頃に私に刻印され、私を満たし、私はそれを一生にわたって体現することになるのである」³⁰⁾。ここで「ドイツ」とは「ドイツ文化」、すなわち「啓蒙主義と教養」と同義であり、「民族感情」という言葉でフランツォースが言い表そうとしたのも偏狭な政治的ナショナリズムではなく、一種の使命感、ドイツ文化 = 啓蒙主義への帰依であった。すなわち、フランツォースは筋金入りの啓蒙主義者に育て上げられたということである。

ユダヤ人が6割以上を占める町とはいえ、ドイツ文化に同化し、ゲッターの外に住むユダヤ人は大都会ならともかく、チョルトコフのような辺境の町にはほとんどいなかった。「故郷のユダヤ人を苦しめていた二重の苦しみ」³¹⁾「すなわち、信仰に由来する憎悪と狂信」を親子二代にわたってフランツォースも味わうことになる。「学校の同級生たち、遊び仲間たちはキリスト教徒であった。ユダヤ人の家庭に行くことはほとんどなかったし、シナゴークには一度も足を踏み入れたことはなかった。ユダヤの慣習も食事の規則も私の両親の家では守られてはいなかった。私は孤島で暮らしているようであった。信仰と言語が私を同級生たちから区別し、同時にそれは私をユダヤ人の子供たちから区別したのであった。私はユダヤ人であったが、彼らとは別の

ユダヤ人であったのだ。私には彼らの言葉は全然理解できなかった。・・・ユダヤ人の子供に汚物を投げつけられ、背教者と罵られることもあった」³¹⁾。ガリツィアは、ハシディズムの中心地であり、同化への抵抗がことのほか強いところであった。とくにチョルトコフには、1859年に「ツァディック(義人)」と呼ばれるハシディズムのカリスマ的導師ダーフィット・モーゼス³²⁾が「王朝」を築き、以降、この町は近郊のハシディームが足繁く詣でるハシディズムの一大センターとなる。もっともこの年、フランツォース一家は、前年に亡くなった父の遺言(「チェルノヴィッツのギムナージウムに入り、それから大学で自由に勉強し、そのあと、できればドイツに定住せよ」³³⁾)に従って、当時東方では唯一のドイツ語ギムナージウムがあったチェルノヴィッツに移って行っている。16才の時、父の墓参でチョルトコフを訪れ、そのとき初めてゲッターの中の生活を目にし、フランツォースは相反する印象を受けている。

多くの習慣が詩的な面をもっていることに私は引きつけられた。彼らの生き方の優れた側面も完全に理解できた。そのうえ私は彼らの歴史と一般的な歴史も十分に心得ていたので、彼らをもつ憂慮すべき点もたしかに彼らひとりの責任ではないことも知っていた。だがその憂慮すべき点というのが数多くあった。とくにかつての、もっとも純粋な一神教の旗手たちがいま嵌り込んでいる迷信を目の当たりにし、私はやりきれない気持ちになったのだ。 ³⁴⁾

チェルノヴィッツに戻ってからもその地のヴァッサーガッセのユダヤ人地区や、ツァディック、アブラハム・ヤーコブの居住地サダゴラに頻りに足を運ぶようになり、イディッシュ語も学び始める³⁵⁾。その後フランツォースはウィーン大学、グラーツ大学で法学を学ぶが、弁護士という職業には自ら適性を感じることができず、洗礼を受けてまで裁判官になりたいとも思わず³⁶⁾、ウィーンでジャーナリストとなり、文章を書いて生計を立て始める。

2

『道化師』という作品は、今日ではフランツォースの代表作とされている長編であるが、死後出版の遺作であり、生前のフランツォースは、もっぱら「半アジア」の作家として知られていた。さきあげた、マウトナーによるフランツォースのパロディーも『金髪のヤインケフ - 半アジアの非文化像』(Der blonde Jainkef. Ein Unkulturbild aus Halb-Asien.)³⁷⁾というタイトルであり、初めて出版されたフランツォースの書物は『半アジアより - ガリツィア、南ロシア、ブコヴィナそしてルーマニアの文化像』(Aus Halb-Asien. Culturbilder aus Galizien, Südrussland, der Bukowina und Rumänien. 1876)という短編集であった。「この書物につけたタイトルの響きはかなり変わっていて耳にたつかも知れないが、私がこのタイトルを選んだわけは、けっしてその響きためではなく、私がここで記述しようと思う地方の文化状況の特徴を簡潔かつ正確に表現しているように思えたからである」³⁸⁾というのがタイトルの由来であったが、「半アジア」はすっかりフランツォースのトレードマークとなった。「半アジア」が意味しているのは、地理的にはウィーンの東、カルパチア山脈とロシアとアジアの草原に挟まれた地域、すなわち、副題にうたわれている「ガリツィア、南ロシア、ブコヴィナそしてルーマニア」であるが、「政治的・社会的状況においては、・・・・ヨーロッパの教養とアジアの野蛮、ヨーロッパの進歩への努力とアジアの怠惰、ヨーロッパの人間性と、民族・宗教集団の非常に野蛮で恐ろしい確執とが出会う」³⁹⁾地域と定義される。「ガリツィア、ルーマニア、南ロシアは、ドイツのように文明化もしていなければ、トゥランのように野蛮でもなく、まさにその両者が混じり合った『半アジア』なのだ！この不思議な薄明を記述することがこの本の目的なのだ。この目的は西のジャーナリストの旅行記とも、東方の作家が行う故郷の記述とも違う」⁴⁰⁾。それは、「私は東方に生まれたが両親はドイツ人であった。私はポドリアの小さな町で育ったが、ドイツ人の家庭に育った」⁴¹⁾からであり、「ドイツ的教養」を身につけているからである、という。「旅行者と愛国的作家との中間」⁴²⁾という立場こそが、東方を「偏見のない態度」⁴³⁾で客観的に記述することを可能にするはずであった。

『半アジアより』は毀誉褒貶含めて評判となり、続編として『ドンからドーナウへ - 「半アジア」の新文化像』(Vom Don zur Donau. Neue Kulturbilder aus "Halb-Asien". 1878)、『大平原より - 半アジアの新文化像』(Aus der großen Ebene. Neue Kulturbilder aus Halb-Asien. 1888)も出版される。西側のヨーロッパ人は、フランツォースが描く「アジアの野蛮」、「アジアの怠惰」、「民族・宗教集団の非常に野蛮で恐ろしい確執」に大いに好奇心をそそられたに違はなく、そのような西側の視線、エキゾチシズムへの期待は、西欧の新聞の通信員としてのフランツォースも意識していた。「半アジア」への西側の人々の関心にさらに拍車をかけた要因として、1860年代以降のガリツィアにおける鉄道網の発達も挙げておかななくてはならないだろう。これにより西側との物流も飛躍的に増大し、人の移動も容易になり、フランツォースも「ノイエ・フライエ・プレッセ」の通信員として「半アジア」を周遊できたのである。

ガリツィア最初の鉄道は三月革命前年、1847年にプロイセン国境のミスウォヴィツェからクラカウまで開通した65Kmであった。これは、帝国最初の鉄道が、ウィーンの北フローリスドルフ - ヴァグラム間を走った10年後のことである。1861年にはウィーンからレンベルクまでの754Kmが一本に結ばれ、さらにその5年後の1866年には、レンベルクから、コロメア、シュペルバーの故郷ザプロトフを經由しチェルノヴィッツに至る267Kmが全線開通し、帝都ウィーンと帝国の東端を結んでガリツィアを縦断する大動脈が完成する。フランツォースがチェルノヴィッツのギムナージウムを卒業しウィーンの大学へ移ったのはこの翌年である。さらにレンベルクから北東へは1869年にブロディーまで延長され、途中クラスネから東に分岐した線がタルノボルを經由し、1871年にロシア帝国との国境ポドヴォウオチスカに達し、ここでロシアの南西鉄道と接続し、ウィーンから黒海のオデッサまでが直接一本に結ばれた。フランツォースが『半アジアより』の一編『オデッサの港にて』(Im Hafen von Odessa. 1872)で、東西の物資が鉄道・船舶で行き交い、種々の民族が入り混じり、様々な言語が飛びかうこの国際港湾都市の活況をスケッチしたのはこの翌年のことであった。1873年には、レンベルク - ブロディー線はさらに北へ、ロシア国境まで延長され、そこでロシアのブジェシチ - キエ

フ線に接続された。あとでふれるように、1881年にロシアでポグロムが起きたとき多くのロシア・ユダヤ人がこの路線でプロディーに避難してくることになる。ガリツィアの鉄道の総延長は1861年にはわずか465Kmであったが、1870年には882Km、1880年には1552Km、1893年には2707Kmと飛躍的に伸びていった⁴⁴⁾。のちに見るように、これは政府のポーランド人懐柔政策の一環であったのだが。ガリツィアの鉄道の伸長と足並みを揃えるように、フランツォースの「半アジア」シリーズは、続編を加え、改版、再版を重ねていったのである。

『半アジアより』の一編『ウィーンからチェルノヴィッツへ』(Von Wien nach Czernowitz. 1875)には、こうした鉄道の発達を背景とし、西からの好奇の視線に最大限に応えようとしているフランツォースの姿勢がうかがえる。大理石のルートシルト(ロスチャイルド)男爵像⁴⁵⁾が見下ろすウィーン北駅を出発した列車は、「ウィーンからジエディツまではヨーロッパを、ジエディツからスニアティンまでは半アジアを」⁴⁶⁾走り、スニアティンから再び「ヨーロッパ」に入り「半アジアの文化的荒野のまただ中に咲き誇る一輪のヨーロッパ」⁴⁷⁾であるチェルノヴィッツに至る。この間クラカウ、レンベルクで「半アジア」の野蛮と後進性が誇張と諧謔をまじえて描写される。

イタリア人たちは、「誇り高き町ジェノヴァ」(Genova la superba)とか、「美しき町フィレンツェ」(Firenze la bella)などと、おのおのの町に響きのよい枕詞を被せている。この風習を半アジアで通用させたら、聖なるクラカウは、「臭いたつ町クラカウ」(Cracovia la stinatoria)としかいいようがないだろう。……この町に住むよう呪われている人間たちが毎年疫病で大量死しないのは実に神の特別な奇跡だ。クラカウがこんなに恐ろしいほど臭い理由について、住民たちはさまざまな見解を有しており、しかもその見解は宗派によって異なっている。ユダヤ人たちは、これは、修道院のせいである、とくに乞食僧のせいなのだと説明する。キリスト教徒たちは、これはカフタンを着て巻き毛をたらしめたユダヤ人プロレタリアートのせいだと説明する。論争はきっと解決がつかないであろう。というのは両方が正しいからだ。⁴⁸⁾

(クラカウの)レストランの中はヨーロッパとはまるで違って見える。……旅行中の地理学者は、テーブルクロスに興味を引かれるだろう。そこには、ありとあらゆる国境線がいろいろなソースで描かれているのだ。たとえば列車の出発によって綿密な研究が妨げられたとしても、3ヶ月後にまたここに座れば、同じソースのシミが付いた同じテーブルクロスに再会できるだろうと考え、彼は自らを慰めることができる。⁴⁹⁾

きみのような無邪気な旅行者がこの(クラカウの)駅の玄関ホールに出て行くとしよう。きみは突然、カフタンを着て巻き毛を垂らし、喧嘩したり媚びたり、わめいたり嘸いたり、突いたり引いたりするユダヤ人たちの群に取り囲まれるのだ。彼らは恐ろしく汚れていて、ぶつかったときにどうしてお互いに貼り付いてしまわないのかきみはほとんど理解できない。⁵⁰⁾

大陸のどの鉄道の客車からもこれほど救いようのない光景を目にすることはほとんどないだろう。不毛の原野、植物もまばらな広野、襤褸を引きずったユダヤ人たち、汚らしい農民たち。あるいは荒んだ村落。そして駅には欠伸をしている数人の地方名士たち、ユダヤ人が数人、そしてほとんど人間という呼び名を付与するに値しないその他の生き物たち。⁵¹⁾

以前ブジェミシルのレストランで、これまでの人生でもっとも風変わりな子牛のソテーを食べたことがあった。詰め物をしたソテーだったが、私の中に発見したものはひどく錆びた釘と鋼鉄のペン先と一束の髪の毛であった。レストランの主人の鼻先に証拠物件をつきつけると、彼は極めて落ち着いてこう言った。「お客様がなぜそのようなお怒りになるのやら私どもには解しかねます。屑鉄を食べるなどと申し上げましたでしょうか。肉のほうをお召し上がりください。」⁵²⁾

誇張と諧謔もミュンヒハウゼンの域であれば荒唐無稽と片づけることもできようが、ここにはさもありませんが入り込む余地が残されている。作者の視線は東から窮状を訴える善意のリアリズムであるよりは西(ウィーン)からの、しかも上(車上)から見下ろす視線であり、その筆致は真しやかで、西側読者は容易に、そして安心して作者の口吻に身を委ね、大いに好奇心と優越感を満たすことができたはずである。例えばつぎのような文章に「アジア蔑視、アジア人に対する軽侮の感情の存在を指摘することは、正当なことであり、また必然的なことでもある」⁵³⁾とするならば、フランツォースの視線に「蔑視」の存在を指摘することはいっそう「正当なことであり、また必然的なこと」であるだろう。

船が飯田河岸の様な石垣へ横にびたりと着くんだから海とは思へない。河岸の上には人が澤山並んでゐる。けれども其大部分は支那のクーリーで、一人見ても汚らしいが、二人寄ると猶見苦しい。斯う澤山塊ると更に不體裁である。余は甲板の上に立って、遠くから此群衆を見下ろしながら、腹の中で、へえー、此奴は妙な所へ着いたねと思つた。⁵⁴⁾

筆者は1908年に大日本帝国から大連へやってきた夏目漱石である。このとき大連は日露戦争後のポーツマス条約(1905年)によって日本の租借地となっているが、実態は植民地であった。日清・日露の戦争に勝ち、大日本帝国はアジアを脱し自らを西欧の列強に擬していた。開化した宗主国の帝都からはるばるやってきて、甲板から「汚ならし」く「見苦し」く「不體裁」な「支那のクーリー」たちを見下ろして「へえー、此奴は妙な所へ着いたね」とつぶやく漱石とフランツォースの視線の等質を生んでいるのは「ヨーロッパの教養とアジアの野蛮、ヨーロッパの進歩への努力とアジアの怠惰」という植民地主義的世界像である。船を列車に、「支那のクーリー」をユダヤ人に置き換えればこれはそのまま『ウィーンからチェルノヴィツッへ』に紛れ込ませることができるほど二人の視線は酷似している。違うのは、漱石が描

写しているのは自分の故郷ではなかったが、フランツォースが描写しているのは自分の故郷であり、同胞であるという点である。すなわち、ここでフランツォースは過剰に同化しているのである。「旅行者と愛国的作家との中間」という立場を踏み外していることは言うまでもない。『半アジアより』には、この一編を含めて23編の短編が収められ、その種類は、エッセイ、紀行文のようなノンフィクションからゴシックロマン風のお話まで様々であるが、しかしいずれも同じ「私」によって語られており、一編だけ抜き出せば明らかなフィクションであっても一巻のなかでは、紀行文の作者と同じ「私」が見たこと、聞いたこととして語られ、フィクションとノンフィクションの狭間は曖昧となり、「西欧の住民にとっては単に物珍しいばかりでなく、前代未聞の信じられないことと見えるに違いない」⁵⁵ 物語も一層のリアリティをもったのであった。

「蔑視の」視線と、「虐げられている人々を救い、手を差し伸べたい」という、父親譲りの啓蒙主義に由来するヒューマンな衝動とはなんの矛盾もなくフランツォースのなかに同居していた。蔑視がいつもそうであるように、フランツォースには蔑視の意識はなかった。クラカウが臭ければ臭いほど、農民たちが汚ければ汚いほど、そしてユダヤ人たちが垢まみれであればあるほど、それはみずからの使命の大きさを証明することとなったのである。「私が願うのは、その地が現在より文明化されることだけ」であり、そこに至る道は「西欧の教養と精神」による以外はなく、「教養と進歩へ向けての一層の戦いを鼓舞し、この戦いにすすむべき道を指し示そうとする」⁵⁶のがこの本の目的であり、フランツォースの使命であった。ことにかつて自分を「背教者」と罵り、汚物を投げつけたゲッターの同胞たちにドイツ的教養を伝え、啓蒙したいという願いは切実であった。フランツォースの作品はドイツ語にも翻訳され⁵⁷、ゲッターでも読まれていたのであるから、なかにはシュペルバーの回想のなかで「レア=ロッテ」にモンタージュされたような、フランツォースに共感する読書好きの少女もいたであろう。またたとえば、ポーランド人カトリック僧とともにシラーの誕生日を祝して「喜びに寄せる歌」を唱和し感涙にむせぶカフタンのユダヤ人の姿(『バルノフのシラー』[Schiller in Barnow. 1875])は、なにがしか啓蒙の息吹をゲッターの中

に送り込んだかもしれない。しかしフランツォース自身が語るところによれば、「正統派のユダヤ人はこの作品(『半アジアより』)を辛辣に攻撃した」⁵⁸⁾のであった。その理由は述べられていないので推測の域をでないが、たとえばザッハー=マゾッホも批判するように「子供の頃からキリスト教的に育てられたユダヤ人フランツォースにとってはポーランドの本当のユダヤ人の家はどこも閉ざされたまま」⁵⁹⁾であり、結局フランツォースはゲッターを外からしか知らなかった(これはザッハー=マゾッホも同じであったが)ということであったのかも知れず、あるいは、ゲッターは「汚れてかび臭い家々」が立ち並ぶ「汚泥の海」、そしてその住民たちは「青白く鋭い輪郭の顔に、不思議な、そして一様に禁欲的な狂信の表情か、あるいは狡猾そうな強欲の表情」を浮かべ、「カフタンに身を包み、垢だらけ」⁶⁰⁾であるというような後進性とマイナス面を強調した、いささかステレオタイプ化した記述を、フランツォースの「使命感」を抜きに蔑視のための蔑視と受け取ったせいであったかも知れない。しかし正統派のユダヤ人が辛辣に攻撃しなくてはならなかったのは、むしろフランツォースの使命のほうであっただろう。

『半アジアより』が版を重ねてゆくあいだに、ヨーロッパのユダヤ人の環境は、西でも東でも変化しつつあった。ヴィルヘルム・マルが書いていた反ユダヤ主義的パンフレットは、60年代にはまったく世間の関心をひかなかったが、1879年にベルリンで発行した『ゲルマン文化に対するユダヤ文化の勝利』は大きな反響を呼び、同年マルは「反ユダヤ主義者同盟」を旗揚げし、「反ユダヤ主義」キャンペーンを開始する⁶¹⁾。ロシアでは1881年3月に皇帝アレクサンドル2世が暗殺され、それがユダヤ人によるものという噂が広がり、4月にイエリザヴェトグラードで起きたボグロムは、その後断続的に数年にわたり、エカテリノスラフ、ポルタヴァ、チェルニゴフ、キエフ、オデッサなどおもに南ロシアの町村に波及し、大量のユダヤ人がロシア、東欧から西へと逃れ、さらにヨーロッパ大陸に見切りをつけ新大陸に渡っていった。ヨーロッパから新大陸へのユダヤ人移民は1840年から1880年の40年間には20万人強であったが、1881年から1914年の33年間で240万人のユダヤ人が主としてロシア、東ヨーロッパから新大陸をめざした。うちおよそ85%が合衆国東海岸に移住していった。⁶²⁾ハンガリーでは1882年にティサ=エスラー

ルで儀式殺人の噂がひろまりユダヤ人襲撃が相次いだ。ウィーンでも1887年に反ユダヤ主義を標榜するカール・ルーエガーのキリスト教社会同盟が結成され、10年後にルーエガーはウィーン市長に選ばれる。反ユダヤ主義がヨーロッパ全土に広まってゆくなかで、1894年にドレフュス事件が起きる。そのとき「ノイエ・フライエ・プレッセ」の通信員としてパリから裁判のレポートを発信してきたのがテオドア・ヘルツルであった。「ヘルツルがドレフュス裁判に見たものは、古典的な人権の国でさえもがもはや昔のままではなかったということである」⁶³⁾(E.プロッホ)。ヘルツルは啓蒙主義の終焉と西欧への決別を宣言する。「私は、人間がしだいに高い文明へと向上して行くことを信じている。ただそれは絶望的な程ゆっくりとした歩みなのだと思う。中程度の人々の心までが、『賢者ナータン』を書いたときにレッシングが持っていたような寛容の精神へと変容するのを待とうとするならば、我々の生活や、我々の息子や孫や曾孫たちの生活は、そのために空しく費やされてしまうかもしれない」⁶⁴⁾(ヘルツル『ユダヤ人国家』)。「啓蒙主義時代など何百年も前に、実際には、きわめて高貴な精神の持ち主にとってのみ存在したにすぎないのである」⁶⁵⁾(同)。ヘルツルにいわせれば、悠長に啓蒙主義など説いている時代ではない、ということである。ヘルツルのシオニズムには、先行したモーゼス・ヘスのシオニズムにあったラジカリズムもなく、民主主義、資本主義を基調としたものであり、しかも現実の国際政治を見据えてのプログラムであったため自由主義的ブルジョア同化ユダヤ人たちはこれを抵抗なく受け入れることができた。⁶⁶⁾「半アジア」のユダヤ人たちからさえシオニズムへの同調者が出てくるさまはフランツォースにとっては「嘆かましい現象」⁶⁷⁾としか見えなかった。「半アジア」にドイツ文化が普及し、「文明化」すればシオニズムなどは必要ないはずのものであった。フランツォースは「半アジア」に向かって相変わらず啓蒙主義を説き続ける。その楽観性によってフランツォースは徐々に時代から遅れ始めていた。

それどころかフランツォースの作品は、作者の意図とは裏腹に、西欧において東方ユダヤ人に対する偏見を助長し固定するのに一役買ってしまい、その結果として、ロシア・東欧のユダヤ人たちがボグロムから逃れてウィーンを目指したとき、すでに西欧に同化して暮らしていたユダヤ人たちは「ユダ

ヤ」が顕在化し、西側の反ユダヤ主義を刺激することになるのをなによりも恐れ、同胞を忌避するのである。⁶⁸⁾ 1903年ガリツィアに生まれウィーンで活動したイディッシュ語詩人ノイグレッシエルはつぎのように証言している。「ウィーン・ユダヤ人は『ポーランド』の『暗黒のゲッター』の『ジャルゴン』に我慢がならなかった。実をいえば、このことでウィーン・ユダヤ人を悪くいうことはできない。なぜならドイツ語で著作活動を行ったゲルマン至上主義者のガリツィア・ユダヤ人たちこそ、ガリツィアのユダヤ人の生活をこの上なく暗黒に描いて見せたからである。彼らは人種的変造を施すことさえいとわず、ウィーン・ユダヤ人に、ガリツィアが『半アジア』であるかのような幻想を与えた。そして『イエツケ』たちはそれを真に受けたのである。」⁶⁹⁾ 「ロシアのユダヤ人に対するボグロム(1881/82年)は世界中のユダヤ人に衝撃を与えたが、ウィーンの同化ユダヤ人に対しても影響なしではすまなかった。そのことを、最もよく示しているのが次の事実である。すなわち2万人以上のユダヤ人ボグロム難民がロシアからブローディまでたどり着いたものの、そこで彼らは飢えに倒れ、路上に横たわるのみ、との情報がウィーンにはいると、のちにウィーンのユダヤ人ゲマインデの会長となるアルフレート・シュターンは、不幸な難民を救援するためブローディへと急行する。しかしそれは、彼らが一刻も早くオーストリアを離れ、アメリカへと立ち去るのを助けるためであった。」⁷⁰⁾ ノイグレッシエルのこれらの証言は第2次大戦後のものであるが、「半アジア」の語はあきらかにフランツォースを指している。「私は、これまでの著作でも私の民族同胞に対する義務を果たしてきたと思っている。……彼らの損失にならないように、彼らの利益になるように書いてきたと思っている。私のこの確信は、ハシディズムの立場から私を非難・攻撃する人々によっても揺るがされることはなかった」⁷¹⁾と確信するフランツォースにとっては不本意な読まれ方であった。しかしフランツォースの視線に過剰な同化による蔑視の存在を指摘することが正当であるとき、ノイグレッシエルの証言を誤読と抗弁することはできないだろう。

3

『半アジアより』の初版(1876年)から四半世紀後の第4版(1901年)の序

でフランツォースは、この25年間の「半アジア」の変化を、「私が望ましい
と思い、半アジアの諸民族にとっても有益であると私が述べたのとは違って
いた。この本が奉仕する理念は、1876年以降、東方でほとんど敗北ばかりを
おさめ、勝利することはほとんどなかった」⁷²⁾と敗北を認めている。「この
本が奉仕する理念」とは、いうまでもなく啓蒙主義と教養の理念であり、ド
イツ文化の普及を通じて「民族性と宗教のあらゆる相違を超越」すること
であった。しかしこの25年間に勝利したのは、フランツォースの言葉でいえば、
「宗教間の憎悪と人種憎悪」⁷³⁾すなわち反ユダヤ主義を含む諸宗教・諸民族
間の抗争であり、後世の歴史家が「ナショナリズム」の名で括ることになる
ものであった。

ヨーゼフ2世以来オーストリア帝国のガリツィア統治政策の基本は、ポー
ランド貴族の支配を弱体化することであった。農奴制の廃止による恩恵を蒙
ったのもそれまでおおかたがポーランド貴族の農奴であったルテニア人であ
った。また学校改革に際しても、「ガリツィアにおける学校規則は、住民の
3分の2におよぶルテニア民族を新たな学校制度から決して排除することな
く、ギリシャ・カトリック教会の子供たち(ルテニア人)、ラテン教会の子供
たち(ポーランド人)、アルメニア教会の子供たち(アルメニア人)を完全に等
しく考慮して作られなくてはならない」とヨーゼフ2世は1777年にガリツィ
ア総督に命じた⁷⁴⁾。オーストリアに併合されたときガリツィアにはルテニア
語の小学校を持つ村はほとんどなかった⁷⁵⁾のであるからこの命令もルテニア
人の境遇を大きく前進させるものであった。「ルテニア語の特別な推進者」
ヨーゼフ2世は、フランツォースの祖父が学んだレンベルクのドイツ語大学
に「ひじょうに多くのルテニア語の講義を設置したが、ポーランド語の講義
は一つも設置しなかった」⁷⁶⁾。裁判・行政の言語も、ポーランドの公用語で
あったラテン語からドイツ語に変更された⁷⁷⁾。『半アジアより』の一編『ピ
アラの裁判官』(Der Richter von Biala. 1875)の中のつぎのようなルテニア人農
夫の台詞に、当時のルテニア人の環境の変化が反映している。

この一つ頭の鷲(ポーランドの紋章は単頭の白鷲 - 引用者注)のもとで
俺たちがどんな扱いをされたか知ってるか。家畜だ。家畜以下だ。貴

族は自分の牛を撃ち殺すことは絶対になかったが、自分の農民たちはしょっちゅう撃ち殺した。ポーランドの鷲野郎め！奴らはなんでもかんでも切り刻み強奪しやがった。俺たちの自由、俺たちの神、俺たちの言葉、俺たちの放牧地、俺たちの共有農地を！だがそこにドイツ人の皇帝がやってきた。皇帝は当時は女だった。そしてこの土地を手に入れた。そしてそれ以来いくぶんよくなった。いくぶんな！なにせ皇帝は遠くにおられたのだから。だがいずれにせよ俺たちは人間になったのだ。⁷⁸⁾

ルテニア人に同情を注ぎ、ポーランド人を敵視する姿勢をフランツォースはオーストリア政府と共有した。この一編に限らない。圧政に対する自由主義的な抵抗というシラー的図式をガリツィアに適用するとき、いきおいポーランド人には悪役が割り振られる。他にも同種の例をあげると、つぎに引くのは同じく『半アジアより』の一編『ユダヤ系ポーランド人』に登場するあるユダヤ人の台詞である。

ポーランド人を見よ。それから君自身を見よ。同じ人間ではないのか。同じ血と肉を持っているのではないか。なぜ彼は君を嘲笑することが許されるのだ。なぜ彼は君の顔に唾を吐くことが許されるのだ。なぜ堂々と権利を主張しないのだ。権利は光や空気と同じようにすべての人々に共通に与えられているのではないか。そんなことを神が望んでいるだろうか。皇帝が望んでいるだろうか。法が望んでいるだろうか。否である。そんなことを望んでいるのはポーランド人だけである。14年前にはどうであったかを思い出してみよ。当時役人たちはドイツ人だった。彼らは我々の言葉を理解し、ポーランド人が我々を踏みつけたとき我々を守ってくれた。だがそれでも当時はよい時代ではなかった。いまはすべての民族、すべての領邦にとってはより楽な、よりよい時代なのだ。なのにガリツィアはそうではない。ここはポーランド人が支配しているからだ。彼らの支配をさらに望むのか。彼らの権力をさらに強くしたいのか。⁷⁹⁾

これはほぼフランツォース自身の声と考えてよい。あるいは、つぎは「半アジア」シリーズからではなく独立した作品であるが、『パルマのモシユコ』に登場する徴兵局のポーランド人隊長の台詞である。

このユダヤ人は採用できない。皇帝にお仕えするのはポーランド人とルテニア人だけだ。ポーランド人たちは曹長や将校になるが、愚かなルテニア人たちはいつまでも一兵卒だ。そもそもやつらはポーランド人の長靴や銃を磨くためだけに入隊しているのだからな。だがユダヤ人たちはそれさえうまくできない。⁸⁰⁾

このようにポーランド人はほとんどの場合がステレオタイプ化した悪役として描かれている。啓蒙主義の理念からすれば、民族性を越えたところに人間を見なくてはならないはずであり、その人間性が抑圧されているところでは民族を問わず解放が唱えられなくてはならないはずであった。「ポーランド人が抑圧されてところ、たとえば、ロシアにおいては私は、第2巻でそれが示されているように、私はポーランド人に同情を寄せている」⁸¹⁾とフランツォースは、自らの公平を主張している。ここでフランツォースが指しているのは、『半アジアより』の「南ロシアより」の章に収められている『シュナップス伯爵』(Der Schnapsgraf, 1868)と『祭壇にて』(Am Altare, 1870)の2編である。『シュナップス伯爵』は、ロシア人に「家も農場も、幸せも、名前も、我が家の名誉も」、そして妻までも奪われてしまい、「シュナップスはレーテーのように忘れさせてくれるから飲むのです」⁸²⁾という落魄したポーランド人伯爵の身の上話であり、『祭壇にて』のほうも、やはりロシア人に城と庭園を奪われた愛国的なポーランド人没落貴族の末裔が主人公であるが、その貴族の埋葬に際して、監視と検閲をかねて参列していたロシア人少佐が、死者に語りかけるポーランド人神父の言葉の端にポーランド愛国主義的な響き(「そして鎖は断ち切られるだろう！ 汝の犠牲は無駄ではなかった。我々の死灰より復讐者の出でんことを！」⁸³⁾)を聞き取り、神父を即座に射殺するという結末である。いずれも祖国を奪われロシア人の支配下で不遇を託つ

ポーランド人の運命に対する深い同情とロシアのポーランド支配に対する義憤が感じられる。オーストリアもまたロシア、プロイセンとともにポーランド分割に与り、ポーランドを世界地図から抹消した列強であったことをフランツォースは忘れていないわけではない。しかしすでに見たように、作中のルテニア人に、「だがそこにドイツ人の皇帝がやってきた。・・・そしてそれ以来いくぶんよくなった。・・・いずれにせよ俺たちは人間になったのだ」と語らせることによって、オーストリアによるガリツィア領有は、マリア・テレジア、ヨーゼフ2世によってと同様、フランツォースによっても、ポーランド支配からのルテニア人の解放、ガリツィアの文明化、すなわち啓蒙として肯定されているのである。啓蒙主義は植民地主義のイデオロギーたりうるのである。

オーストリア政府のルテニア人優遇政策は当然のことポーランド人の抵抗を引き起こし、政府はいったんは軌道修正せざるを得なくなる。1793年にガリツィアでは、法廷言語として再びラテン語が採用され、レンベルク大学におけるルテニア語による講義も1808年に中止された。⁸⁴⁾ 1848年3月の「ルヴフ(レンベルク)請願」でポーランド人はガリツィアにおける非ポーランド人官吏の解職、学校・官庁・裁判所へのポーランド語導入などを掲げた⁸⁵⁾が、ガリツィア総督シュタディオが農民層と貴族の利害を分断する策を弄したため、結局ガリツィアのポーランド化は実を結ばず、その後の反動期に政府はふたたびルテニア人優遇政策を強めてゆくのである。「1848年12月9日の教育省令は、ルテニア人小学校の強化ばかりでなく、レンベルクのドイツ語大学とブジェミシルの神学校にルテニア語の講義を設置し、これまではポーランド語ギムナジウムであったレンベルクの二つのギムナジウムにおいてルテニア語を尊重すること、そしてガリツィアのルテニア人地域である平野部のギムナジウムをルテニア化することを命じ、さらに1849年8月23日の内務省令は、レンベルク市委員会の審議において一層ルテニア語を尊重すること、レンベルクの通り、広場のすべての名称、市参事会広報を両言語で記すことを命じた」⁸⁶⁾。「1850年9月29日の皇帝の勅令」は、ガリツィアの領邦憲法として「ポーランド民族、およびルテニア民族、その他、領邦内に住む諸民族は同権であり、どの民族もその民族性および言語の維持と育成に対して不

可侵の権利を有する」⁸⁷⁾ことを承認した。

『半アジアより』の初版から第4版までの25年、すなわち19世紀末の四半世紀に顕在化してくる変化の萌芽は1867年の、オーストリアとハンガリーのアウスグラヒ、およびオーストリア国家基本法の成立のうちにあった。国家基本法はその19条で、すでにガリツィアに対しては公布していた民族の同権原則を国家の基本に据えた⁸⁸⁾。ポーランド人が、この19条を抛とし、ハンガリー同様の特別な地位を要求したのが1868年のいわゆる「ガリツィア決議」であった。ここでポーランド人は、政府が「我々の領邦(ガリツィア)の歴史的・政治的過去、その特殊な民族性、文明化の程度と領土の広さに見合うだけの立法上・行政上の自主性を我々の領邦に対して認めてはならず、それゆえ、民族的発展の願望にも、そのための条件にも、そして現実的な領邦の要求にも応えておらず、この状態がこれ以上続くと一般的な不満が募り、我々の地方の繁栄と君主国全体の幸福を損なうような反作用を及ぼさざるを得ない」⁸⁹⁾、といささか脅迫的に政府に「民族自治」の要求を突きつけたのであった。議会レベルでのポーランド・ナショナリズムの発現であった。もちろん政府はこれを承認しなかったが、政府をかなり狼狽させたことは確かであった。ガリツィアを第二のハンガリーにしないための対応策として政府はこのあと、さきに見たように、鉄道の建設を初めとするポーランド人懐柔策を繰りひろげてゆくことになる。「政府は政令や、一部は領邦法、あるいは行政措置によって彼らの希望に添おうとした。とくにポーランド語は領邦のいたるところで優遇され、とくに官庁の内務において、そして学校においてそれは影響をあらわした。さらに財政の分野においてポーランド人たちに対して歩み寄りがなされた。帝国末期の数十年においては莫大な金額がガリツィアの鉄道建設、道路建設に対して、また文化的目的、行政上の目的のために提供された。そしてそれは、もっぱらポーランド人の役にたったのであり、ルテニア人には利益をもたらさなかった」⁹⁰⁾。この時期オーストリア政府は一方でボヘミアのチェコ人からの言語権拡大要求への対応に忙殺されていた。1880年のターフェ・シュトレマイアーの言語令⁹¹⁾、1897年のバーデニの言語令⁹²⁾は、チェコ語の権利を大幅に拡大し、ボヘミアにおけるドイツ語の地位は低下した。1882年にはプラハのカレル大学もドイツ語とチェコ語の

大学に分割され⁹³⁾、チェコ人は初めて母語による大学を所有する。19世紀最後の四半世紀にオーストリア政府は、高まるナショナリズムを前に、国家を維持するために各地で諸民族に妥協を強いられていた。

ドイツ、ロシア、オーストリアに分断されたポーランド人にとって「ガリツィアは、ポーランド語を使うことができ、ポーランドの芸術、文化、学問が栄え、ポーランド人が二流の市民にならずにすんだ唯一の土地であった」⁹⁴⁾し、他方、ロシアとオーストリアに分属させられたウクライナ(ルテニア)人にとっても、「(ロシア領)ドニエプル・ウクライナでは19世紀に入って厳しいロシア化政策が進行し、内相ヴァルナーエフの指令、エムス法などによってウクライナ語使用までが禁じられたが、ガリツィアではウクライナ人の民族生活は比較的自由で」あり、「ドニエプル・ウクライナで活動を制限された文化人、作家、政治家が多くガリツィアに亡命し、19世紀を通じてガリツィアはウクライナ民族運動の中心となっていた」⁹⁵⁾。ガリツィアは民族自決へ向けての諸民族のナショナリズムの揺籃となり、帝国崩壊後の地図の下書きが徐々に描かれはじめていた。ちょうどこの頃にガリツィアのプロディーにユダヤ人として生まれ、帝国の崩壊を見届けたのちにこの時代を振り返ったヨーゼフ・ロートの簡潔な要約を借りると、「19世紀になって人々は、個人が市民として認められたいのなら特定の国あるいは民族に属さなくてはならないことを発見した。オーストリアの劇作家グリルパルツァーは『ヒューマニズムから民族主義を経て野蛮へ』と語ったが、折しも当時、民族主義がわが世の春を謳歌し、今日、猛威をふるっている野蛮化の先触れを演じていた。それは一般に愛国心といわれるもので、新時代の卑しい階層が、みずからに応じて生み出した卑しい感情のたまものである。……タルノボールであれ、サライエボであれ、ウィーンであれ、ブリュンであれ、プラハであれ、チェルノヴィッツであれ、オーデルブルクであれ、トレッパウであれ、どこにしようともオーストリア人以外のなにものでもなかった人々が、『時代の声』に従いはじめた。いまやそれぞれがポーランド人、チェコ人、ウクライナ人、ドイツ人、ルーマニア人、スロヴェニア人、クロアチア人であって、みずからの『国家』を持つべし、というわけだ」⁹⁶⁾。これがフランツォースにとっては、「私が望ましいと思い、半アジアの諸民族にとっても有益であ

ると私が述べたのとは違っていた」のであった。「民族というものを優遇し、常にその特殊な関心をひじょうにはっきりと、また、きわめて傍若無人に強調してきた結果、ガリツィアのポーランド人とルテニア人、ブコヴィナのルーマニア人とルテニア人がこれまでになかったほど互いに憎みあうこととなったのである。まず第一に責任はターフェとその後継者たちにある」⁹⁷⁾と、フランツォースは政府の姿勢を糾弾するが、異民族の支配下において「自らの民族性と言語」を、憲法が保証している通りに維持し育ててゆこうする諸民族の努力もフランツォースには、「宗教間の憎悪と人種憎悪」の部分しか見えていなかった。「私たちは自分たちの民族なのですか？ 民族とはいったい何なのでしょう。キリスト教徒とユダヤ教徒は人間である前にキリスト教徒とユダヤ教徒なのですか」というナータンの問いかけに対して、「人間である前に」ポーランド人であり、ウクライナ人であり、チェコ人であり、あるいは、ルーマニア人、スロヴェニア人、クロアチア人として初めて人間たりうるのであり、「私たちは自分たちの民族」であると応えたのがナショナリズムであった。ナショナリズムの前にフランツォースの古典的な啓蒙主義はすでに無効であり、「ほとんど敗北ばかりをおさめ」たのであった。それどころか、「この本は、こうした悲しい事態、ポーランド的要素の不当な支配に対して戦うのだ」⁹⁸⁾、あるいは、「私はガリツィアにおけるポーランド人支配に対してなによりもまずドイツ人として戦うのだ。なぜならその地におけるドイツ文化の圧迫が私を憤慨させるからである」⁹⁹⁾、あるいは、「私は彼ら(ポーランド人)とオーストリア人として戦う。私は正義感から彼らと戦う」¹⁰⁰⁾と述べる時フランツォースは、ナショナリズムの磁場のなかにドイツ・ナショナリストとして巻き込まれ、民族からの超越をめざしたはずの立場が一民族として相対化されてしまっていた。フランツォースの「ドイツ」は現存した「ドイツ」とは関わりのない、すでに「神話」に近づきつつあった「詩人と思想家の民族」¹⁰¹⁾としての「ドイツ」であり、「ゲルマン化とドイツ文化の普及とは違うのだ。その間には祝福の行為と犯罪とを隔てる裂け目がある」¹⁰²⁾、と自分の立場を政治的ナショナリズムから区別しようとしているのであるが、フランツォースと「神話」を共有しえず、「ドイツ」とは啓蒙主義のドイツではなく、ビスマルクのドイツ、ウィーン政府のドイ

ツ、すなわち支配者・抑圧者ドイツにすぎなかった諸民族にとってはその差は見えにくかったであろう。「西欧においてひどく追いつめられているドイツ文化は東方においては完全に地に墜ちた。偉大なハプスブルク家のヨーゼフ2世が蒔き、彼の後継者たちも決して疎かにすることはなかったあの高貴な種子は今日では踏みにじられ砕かれ、雑草が図々しくも楽しげに生い茂っている。疑いなく、ドイツ文化の国家オーストリアの夢は実際終わったようだ」¹⁰³⁾というフランツォースの歴史認識は正確であるが、それにもかかわらずフランツォースが四半世紀後にもなおまだ、「おそらく読者に、私とおなじように楽天的に考えるよう要求することは許されないであろうが、だが私としては、人類と東方の諸民族の進歩、改良そして洗練を信じている。真理は勝つ！」という宣言によって第4版の序を結ばざるを得なかったのは、それが自らのアイデンティティにかかわってくるからであった。この時代のナショナリズムの先鋭化については「私はドイツ人であると同時にユダヤ人」¹⁰⁴⁾というような在り方を許さなくなることをフランツォースは知悉していた。フランツォースの「この本が奉仕する理念」が実現していたならば、土地と歴史を持たないがゆえに「少数民族」とさえ見なされることのなかった「反・民族」としてのユダヤ人も、「どこにいようとオーストリア人以外のなにものでもない」人間としてその居場所を見出すことができたはずであった。

そもそもフランツォースはその生年が「ヨーロッパ・ナショナリズムの元年」であり、出生のエピソードにそれはすでに刻印されていたのであった。

1848年の晩秋の東ガリツィアはひどい時代だった。ポーランド人たちが蜂起し、半年前にポズナニの同胞たちがプロイセン人に対して加えたのと同じ運命を、ガリツィアのドイツ人の一人一人に味わわせようとしていた。私の父も迫害の対象となった。というのも彼は、第一にオーストリア・ハンガリー帝国の管区医師として働いていたからであり、また、彼は常に熱心なドイツ人として活動していたからである。毎日脅迫状が降るように舞い込んだ。郊外では蜂起が宣言され、町なかでは襲撃が予想された。親切な人々は父に逃亡することを勧めたが、

彼は自分の職を放棄するような男ではなかった。そこですでに私を身ごもっていた妻と私の兄弟だけを国境の向こうの森番の家へと避難させたのであった。……私はそこで月足らずで生まれたのである。母が父のことをひどく心配したせいだろう。¹⁰⁵⁾

こうして始まったガリツィアのナショナリズムにフランツォースは必敗の啓蒙主義を唱え続けたのであった。やがて西側にナチズムという名の「野蛮」が誕生し、西からやってきた「野蛮」は「半アジア」を蹂躪し、「ヨーロッパの教養とアジアの野蛮、ヨーロッパの進歩への努力とアジアの怠惰、ヨーロッパの人間性と、民族・宗教集団の非常に野蛮で恐ろしい確執」というフランツォースの構図は破綻し、第二次大戦後もその名は復活することはなく、「今日まだカール・エーミール・フランツォースを覚えている人間にはよほど特殊な理由があるに違いない」といわれるまで完全に忘却されたのであった。

注

- 1) Sperber, Manès : Die Wasserträger Gottes. Frankfurt/Main (Fischer Taschenbuch Verlag) 1996, S.99. 訳文は次の邦訳によるが一部変更した。マネス・シュベルパー(鈴木隆雄・藤井忠訳) : すべて過ぎ去りしこと……(水声社) 1998, 91頁。
- 2) Ebd. S.101. 同92頁。
- 3) ポーランド語では<Zabłotów>「ザブウォトゥフ」。現ウクライナのザボロティフ。シュベルパーの記憶の中ではこの町は、「人口三千のうち、九〇パーセントがユダヤ人」(Ebd. S.21同27頁)とあるが、実際には、1896年の住民調査によれば、4232人の住民のうちユダヤ人は半分弱の2092人であった。Vgl. Gemeindelexikon von Galizien. Hrsg. v. der k.k.Statistischen Zentralkommission. Wien 1907, S.616.
- 4) Ebd. S.20. 同27頁。
- 5) Ebd. S.102. 同93頁。
- 6) Sommer, Fred: Kritik und Dichtung, New York(Peter Lang) 1992, S.vii.
- 7) ドイツ自由主義の立場に立つエドゥアルト・バッハー(1846-1908)とモーリッツ・ベネディクト(1849-1920)によって1864年にウィーンで創刊されたユダヤ系新

- 聞。読者層の中心は中産知識階級の同化ユダヤ人。
- 8) Hermand, Jost: Eine Geschichte aus dem Osten. Der Pojaz von Karl Emil Franzos. In: Ders. (hrsg.): Judentum und deutsche Kultur. Köln/Weimar/Wien(Böhlau) 1996, S.51.
- 9) Mauthner, Fritz : Nach berühmten Mustern. Parodische Studien. Stuttgart, Berlin, Leipzig(Union Deutsche Verlagsgesellschaft) 1897.
- 10) ポーランド語では<Czortków>「チョルトクフ」。現ウクライナのチョルトキフ。故郷のこの町をフランツォースは、<Barnow>「バルノフ」という名で多くの作品に登場させている。
- 11) 「ルテニア人」<Ruthene>という名称は中世ラテン語の<Rutheni>に由来する。この語は「古くはロシア人(東スラブ人)一般をさす言葉だったが、後にウクライナ人と白ロシア人に限って用いられるようになった。この語はさらにガリツィアおよびカルパチア=ウクライナに居住するウクライナ人のみをさすようになり、この意味で英語そのほかのヨーロッパ諸語に借用された。」(伊藤一郎：<白ロシア>の起源 - 地名・民族名称と色彩方位観, 562頁。松原正毅編：人類学とは何か [日本放送出版協会]1989所収)。オーストリア帝国においてもウクライナ人に対する公式な呼称として1918年まで使用された。ウクライナ民族主義の高揚とともにようやく20世紀初頭以降だんだんウクライナ人自身が<Ukrainer>という民族名を用いるようになった。Vgl. Biel, Wolfgang : Die Ruthenen. In: Wandruszka/Urbanitsch(hrsg.): Die Habsburgermonarchie 1848-1918. Wien(Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften) 1980, Bd.III/1, S.555.
- 12) Gemeindelexikon von Galizien. S.132.
- 13) ユダヤ人に対して彼らの「民族語」(Nationalsprache)を「礼拝の場合」を除いていかなる公的な場での使用も禁止したのは、ヨーゼフ2世による「1781年10月19日のボヘミアに対する勅令」(Vgl. Fischel, Alfred: Das österreichische Sprachenrecht. Zweite vermehrte, bis zur Gegenwart ergänzte Auflage, Brünn[Friedr. Irrgang] 1910, Nr.47. *一般に行われているように Fischel からの引用はページ数ではなく法令に付された番号で表示する)が最初であった。翌「1782年1月2日および2月13日のユダヤ人勅令」(Vgl. Fischel, Nr.48) によって「ヘブライ語、およびヘブライ語とドイツ語の混合であるいわゆるユダヤの言語と文字 (jüdische Sprache und Schrift) 」の撤廃と「ヘブライ文字とユダヤ文字で書かれたすべての文書」を無効とする命令はニーダーエスターライヒおよびモラヴィアに拡大された。この禁令がガリツィアにも適用されたのは、「1814年10月22日の高等法院令」(vgl. Fischel, Nr. 114) によってであった。三月革命以後、諸民族の言語権が拡大してゆく過程でも、ユダヤ人はそもそも「民族」(Volksstamm) であることさえ法的に認められていなかったため、「諸民族の同権」と「民族性と言語の維持と育成」をうたった国家基本法 (1867年) 第19条が保証する国民の一般的権利の埒外に置かれた。明文化されたユダヤ人の法的地位は、レンベルクとクラカウの市町村令 (1870年/1901年) に

よって与えられた「宗教共同体」(religiöse Gemeinschaft)という特殊な地位のみであった(Vgl. Biel, Wolfgang: Die Juden. In: Wandruszka/Urbanitsch, ebd. Bd.III/2, S.895)。1910年に行われた住民調査の際に、ガリツィアの複数のユダヤ人たちが、日常語の欄に「ユダヤ語」(das Jüdische)と記入して行政処分を受けた。彼らは帝国裁判所に、国家基本法第19条を拠として違憲抗告をする。原告側の意図は、国家にイディッシュ語を地方言語の一つとして承認させ、ひいてはユダヤ人を民族として承認させることであった。審理の途中で裁判長カール・フォン・グラープマイヤーが、「ユダヤ人は、他の民族が誇り得ない純粋な血統をもった民族である」という確信を非常にはっきりと明言する場面もあったが、判決においてはユダヤ人が民族かどうかという問題は留保され(「ユダヤ人が19条の謂うところの民族かどうかは重要ではない」)、違憲抗告において問題であったのは住民調査の日常言語アンケートの申告であり、「ユダヤ語(das Jüdische)は、一方言(eine Lokalsprache)に過ぎず」、従って「第19条のいう保護はここには適用されない」と述べられたのであった(Vgl. Stourzh, Gerald: Die Gleichberechtigung der Volksstämme als Verfassungsprinzip 1848-1918. In: Wandruszka/Urbanitsch, ebd. Bd.III/2, S.1037.)。

- 14) Stupnicki, Hipolit: Das Königreich Galizien und Lodomerien, sammt dem Grossherzogthume Krakau und dem Herzogthum Bukowina. Lemberg (Peter Piller) 1853 (Nachdruck: Helmut Scherer Berlin 1989), S.100.
- 15) Frazos, Karl Emil: Der Pojaz. Eine Geschichte aus dem Osten. Hamburg(Europäische Verlagsanstalt) 1994, S.6.
- 16) Ebd.
- 17) Franzos: Mein Erstlingswerk: "Die Juden von Barnow". In: Ders.(hrsg.): Die Geschichte des Erstlingswerks. Berlin(Concordia Deutsche Verlags-Anstalt) o.J. S.215ff.
- 18) タルノボルは1809年のナポレオンとの戦争後のシェンブレン和約により、ロシアに割譲され、1815年のウィーン会議でオーストリアがこの地を取り戻すまでロシア領であった。
- 19) Fischel, Nr.69a.
- 20) Gotthold Ephraim Lessings Sämtliche Schriften. Stuttgart (Götschen) 1887(Nachdruck: Walter de Gruyter 1968) Bd.III, S.63.
- 21) ジョージ・L・モッセ(三宅昭良訳) : ユダヤ人の<ドイツ>(講談社)1996, 14頁。
- 22) 同21頁。
- 23) 同15頁。
- 24) 同14頁。
- 25) 同13頁。
- 26) Schwarcz, Alfredo José : Trotz allem...: Die deutschsprachigen Juden in Argentinien.

- Wien/Köln/Weimar(Böhlau) 1995, S.214.
- 27) Franzos, Mein Erstlingswerk: "Die Juden von Barnow", S.217.
- 28) Ebd. S.220
- 29) Franzos, Karl Emil: Moschko von Parma. Geschichte eines jüdischen Soldaten. Leipzig(Verlag von Duncker & Humblot) 1880, S.279f. 「平原」(Ebene)は東ガリツィアのポドリャ平原を指す。
- 30) Franzos, Der Pojaz. S.6.
- 31) Ebd.
- 32) ダーフィット・モーゼスは、東ガリツィア一帯のユダヤ人に影響力を持っていたツァディック、ルジン・イスラエルの5番目の息子であった。2番目の息子アブラハム・ヤーコブがサダゴラの「王朝」を築く。この3人のラビの「物語」は、Buber, Martin: Die Erzählungen der Chassidim. Zürich(Manesse) 1996に採録されている。Vgl. Encyclopaedia Judaica, Jerusalem, 1978, Vol.14, 526ff.
- 33) Franzos, Mein Erstlingswerk: "Die Juden von Barnow", S.229.
- 34) Ebd. S.231.
- 35) Ebd. S.230. フランツォースのイディッシュ語については、生前のフランツォースを知る人の次のような証言がある：「ギムナジウムに通うために大きな町に移ってからは、休みの時にだけ帰ってきた。すると彼はゲットー地区のユダヤ人たちとたいそう熱心につきあい、たくさんの人々と知り合いになり、イディッシュ語を学んだ。彼がイディッシュ語をしゃべったことは一度もなかった。」(Lachs, Minna: Sentimental Journey. In: Stefan Simonek/Alois Woldan: Galizien. Klagenfurt/Celovec[Wieser] 1998, S.175.)
- 36) Franzos, Der Pojaz. S.9.
- 37) Mauthner, ebd. S.54-60.
- 38) Franzos, Karl Emil: Aus Halb-Asien. Zweite, revidierte Auflage, Leipzig(Verlag von Duncker & Humblot) 1878, 1.Bd. S.3.
- 39) Ebd.
- 40) Ebd. S.5.
- 41) Ebd.
- 42) Ebd.
- 43) Ebd.
- 44) Die österreichisch-ungarische Monarchie in Wort und Bild. Galizien. Wien(Druck und Verlag der kaiserlich-königlichen Hof- und Staatsdruckerei) 1898, S.881ff. Czernin, Rudolf Graf: Aufgabe und Ziele des k.k. Eisenbahnministeriums. Wien (Kommisionsverlag von Carl Gerold's Sohn) 1902, S.146.
- 45) 1830年にガリツィアとウィーンを結ぶ鉄道を最初に計画したのがザロモン・マイヤー・ロートシルト(1774-1855)であった。計画ではプロディーからトリエステに

およぶはずのものであった。Vgl. Die österreichisch-ungarische Monarchie in Wort und Bild. Galizien. S.881.

- 46) Franzos, Von Wien nach Czernowitz. In: Aus Halb-Asien. 1878, 2.Bd. S.207.
- 47) Ebd. S.225.
- 48) Ebd. S.217. <stincatoria>はドイツ語<stinken>(悪臭を発する)の語幹に基づく造語。
- 49) Ebd. S.218.
- 50) Ebd. S.219.
- 51) Ebd. S.220.
- 52) Ebd.
- 53) 川村湊：作文のなかの大日本帝国(岩波書店)2000年、184頁。
- 54) 夏目漱石：満韓ところどころ(岩波書店)1966年、漱石全集、第8巻160頁。
- 55) Franzos, Aus Halb-Asien. 1878, 1.Bd. S.3f.
- 56) Ebd. S.8.
- 57) 『半アジアより』は「15の言語に翻訳された。完訳は、デンマーク語、オランダ語、スウェーデン語、(検閲によりクレームがついた部分を削除した)ロシア語である。エッセイを除いた小説スタイルの選集は、フランス語、英語、イタリア語、ハンガリー語、ルテニア語が出版されている。エッセイの選集はポーランド語、ルーマニア語、ギリシャ語、フィンランド語、スペイン語、ヘブライ語で出版されている。変わったところでは、まずヴィルナで、ついでニューヨークで正統派ユダヤ教徒一派に対する闘争手段として、いわゆるユダヤ・ドイツ語、すなわち東方ユダヤ人の墮落したジャルゴンへの翻訳がおこなれた。」(Franzos, Karl Emil: Aus Halb-Asien. Vierte gänzlich umgearbeitete Auflage. Berlin[Corcordia Deutsche Verlags-Anstalt] 1901, 1.Bd. S.VIII.)
- 58) Franzos, Aus Halb-Asien. 1878, 1.Bd. S.XII.
- 59) Sacher-Masoch, Leopold von: Ein polnischer Roman. In: Auf der Höhe Bd.13(Leipzig 1884) S.458ff. Zit. bei: Pazi, Margarita: Karl Emil Franzos' Assimilationsvorstellung und Assimilationserfahrung. In: Hans Otto Horch/Horst Denkler(Hrsg.): *Conditio Judaica. Judentum, Antisemitismus und deutschsprachige Literatur vom 18.Jahrhundert bis zum Ersten Weltkrieg. Zweiter Teil.* Tübingen(Max Niemeyer) 1989, S.219.
- 60) Fransoz, Ein jüdisches Volksgericht(1873). In: Aus Halb-Asien. 1878, 1.Bd. S.245.
- 61) Vgl. Pulzer, Peter: Die Wiederkehr des alten Hasses. In: Meyer, Michael A.(hrsg.): *Deutsch-Jüdische Geschichte in der Neuzeit.* München(C.H.Beck) 1997, Bd.III, S.193.
- 62) Vgl. *Encyclopaedia Judaica.* Vol.16, 1520
- 63) Bloch, Ernst: *Das Prinzip Hoffnung.* Frankfurt/Main(Suhrkamp) 1985, S.703.
- 64) Herzl, Theodor: *Der Judenstaat.* Augsburg(Ölbaum) 1996, S.14. 訳文は次の邦訳によるが一部変更した。テオドール・ヘルツル(佐藤康彦訳)：ユダヤ人国家(法政大学出版局)1997, 7頁。

- 65) Ebd. S.15. 同8頁。
- 66) Vgl. Bloch, ebd.
- 67) Franzos, Aus Halb-Asien. 1901, 1.Bd. S.XXXIX.
- 68) 「こうした東方ユダヤ人たちは、着ているもの、言葉そてかれらの一般的な慣習によって『ユダヤ』を公然と曝したので、すでに完全にドイツ社会に同化していると感じていたドイツ・ユダヤ人たちにとってはある種の『危険』であった。彼らは、東方ユダヤ人の存在が反ユダヤ主義を喚起し、彼らと一緒にたにされることによって、自分たちが苦勞して手に入れた『ユダヤ教を信じるドイツ市民』という立場が危険に曝されるだろうことを恐れたのであった」(Schwarcz, ebd. S.72)。
- 69) メンデル・ノイグレッツェル(野村真理訳)：イディッシュのウィーン(松籟社)1997, 22頁。「イエツケ」(Jecke)については、Schwarcz(ebd. S.24)に次のような説明がある。「東欧のユダヤ人たちがドイツのユダヤ人およびドイツ語を話すすべてのユダヤ人たちに与えた名称。起源は、おそらくはドイツ語の"Jacke"であり、ドイツへの同化、適応のシンボルと見なされていた」。東欧の正統派ユダヤ人の象徴カフタンと対立するシンボルである。フランツオースの『道化師』のなかにも、ゲッターを出た主人公がカフタンの丈をドイツ風に2指尺(約40センチ)切りつめる象徴的な場面がある。Vgl. Franzos, Der Pojaz. S.275
- 70) 同24頁。
- 71) Franzos, Der Pojaz. S.10.
- 72) Franzos, Aus Halb-Asien. 1901, 1.Bd. S.XXVIII
- 73) Ebd. S.XXIX
- 74) Fischel, S.XXXIII
- 75) Wenedikter, Richard: Die Karpathenländer. In: Hugelmann, Karl Gottfried(hrsg.): Das Nationalitätenrecht des alten Österreich. Wien/Leipzig(Wilhelm Braumüller Universitäts-Verlagsbuchhandlung) 1934, S.688.
- 76) Ebd. S.689.
- 77) Ebd.
- 78) Franzos: Der Richter von Biala. In: Aus Halb-Asien. 1878, 1.Bd. S.101. 「女」はもちろんマリア・テレジアを指す。
- 79) Franzos, Karl Emil: Jüdische Polen. In: Aus Halb-Asien. 1878, 1.Bd. S.239.
- 80) Franzos, Moschko von Parma. S.51.
- 81) Franzos, Aus Halb-Asien. 1878, 1.Bd. S.19.
- 82) Franzos, Karl Emil: Der Schanpsgraf. In: Aus Halb-Asien. 1878, 1.Bd. S.312.
- 83) Franzos, Karl Emil: Am Altare. In: Aus Halb-Asien. 1878, 1.Bd. S.340.
- 84) Wenedikter, S.689.

- 85) Helfert, Joseph Alexander Freiherr von: Geschichte der österreichischen Revolution. Freiburg in Breisgau/Wien(Herdersche Verlagshandlung) 1907, 1.Bd. S.427.
- 86) Vgl. Wenedikter, S.690. Fischel, Nr.178, Nr.188, Nr.202.
- 87) Fischel, Nr.202.
- 88) 「すべての民族は平等であり、各民族は自らの民族性と言語の維持と育成に対して不可侵の権利を有する。学校、官庁、公的生活においてすべての地方言語(landesübliche Sprache)が平等であることは国家によって承認される。複数の民族が住む領邦においては、公教育を行う施設は、各々の民族が第二の領邦言語(Landessprache)の習得を強制されることなく、自らの言語による教育に必要な手段を得られるように整備されていなくてはならない。」(Fischel, Nr.305.)
- 89) Bernatzik, Edmund(hrsg.): Die österreichischen Verfassungsgesetze mit Erläuterungen. Wien(Manzsche k.u.k. Hof-Verlags- und Universitäts-Buchhandlung) 1911, S.1132.
- 90) Wenedikter, S.692f.
- 91) Vgl. Fischel, Nr.373.
- 92) Vgl. Ebd., Nr.417.
- 93) Vgl. Ebd., Nr.380.
- 94) Kłańska, Maria: Problemfeld Galizien in deutschsprachiger Prosa 1846-1914. Wien/Köln/Weimar(Böhlau) 1991, S.9.
- 95) 中井和夫: ウクライナ・ナショナリズム - 独立のディレンマ(東京大学出版会) 1998, 20頁。
- 96) Roth, Joseph: Die Büste des Kaisers. In: Joseph Roth Werke. Köln(Kiepenheuer & Witsch) 1990, 5.Bd. S.660-661. 訳文は次の邦訳によるが一部変更した。ヨーゼフ・ロート(池内紀訳): 聖なる酔っぱらいの伝説(白水社)1995, 130-131頁。
- 97) Franzos, Aus Halb-Asien. 1901, 1.Bd. S.XXXIV.
- 98) Franzos, Aus Halb-Asien. 1878, 1.Bd. S.18.
- 99) Ebd. S.19.
- 100) Ebd.
- 101) Franzos, Aus Halb-Asien. 1901, 1.Bd. S.XXXI.
- 102) Franzos, Aus Halb-Asien. 1878, 1.Bd. S.10.
- 103) Franzos, Aus Halb-Asien. 1901, 1.Bd. S.XXXII.
- 104) Franzos, Der Pojaz. S.6.
- 105) Ebd. S.5.

* 本稿は日本学術振興会から交付された科学研究費補助金による研究の一部である。

Die Aufklärung und “Halb-Asien” — Versuch über Karl Emil Franzos (1)

Yutaka IKARI

Franzos war 1848 in einer deutsch-jüdischen Familie in Czortkow/Galizien in dritter assimilierter Generation geboren und war zu seinen Lebzeiten bekannt als Autor von der Serie “Halb-Asien”. Unter dem stark aufklärerischen Einfluss von seinem Vater wurde er als “ein Deutscher und ein Jude zugleich” erzogen. Nach der Idee der Aufklärung ist der Mensch ein Mensch vor der Religion und der Nation. Lessings Nathan fragt Tempelherrn: “Sind wir unser Volk? Was heißt denn Volk? Sind Christ und Jude eher Christ und Jude als Mensch?” Und die Bildung im Sinne von Herder, Goethe, Schiller und Humboldt soll den Menschen zu diesem aufklärerischen Menschenbild führen. Diese Idee der Aufklärung und Bildung, das heißt die deutsche Kultur, wurde zu Franzos’ Credo, das seine Identität bildete.

Nach dem Jurastudium in Wien und Graz schrieb er als Journalist Essays und Novellen auf dem Schauplatz vom östlichen Europa, “Halb-Asien”, womit er die Länder meinte, wo sich “seltsam europäische Bildung und asiatische Barbarei, europäisches Vorwärtstreben und asiatische Indolenz, europäische Humanität und so wilder, so grausamer Zwist der Nationen und Glaubensgenossenschaften” begegnen. Seine Bücher fanden ein großes Lesepublikum im Westen, weil seine Essays und Novellen auf dem Schauplatz “Halb-Asien” die Neugier der westlichen Menschen nach dem Osten erweckten und befriedigten. In der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts wuchsen die Eisenbahnlinien in Galizien und damit auch das westliche Interesse am Osten stark. Seine eigentliche Absicht war doch die

europäische Kultur nach Osten zu tragen und dessen Völker, besonders seine orthodoxen Glaubensgenossen aufzuklären. Franzos äußerte seine Absicht ausdrücklich in der Einleitung zu “Aus Halb-Asien”: “Ich wünsche ihn (den Osten) bloß cultivierter, als er derzeit ist, und sehe keinen anderen Weg dazu, als wenn sich der Einfluß und die willige Pflege westlicher Bildung und westlichen Geistes steigern.” Die orthodoxen Juden im Osten, die Chassidim, kritisierten seine stark aufgeklärten, westbewußten Werke heftig, von deren Blick aus ihr traditionelles Glaubensleben und ihre Gewohnheiten aufzulösen und zu bewältigen waren. Inzwischen trat der Antisemitismus in Ost- und Westeuropa hervor. Besonders waren der Pogrom in Südrussland im Jahr 1881, hervorgerufen durch das Attentat auf Alexander II., und die Dreyfus-Affäre entscheidend, die bedeutet, “daß selbst das klassische Bürgerland der Menschenrechte nicht mehr das alte geblieben war.”(E.Bloch) Die Juden konnten keine Hoffnung mehr im Westen und in der westlichen Kultur finden. Assimilieren stellte keine Erlösung für die Juden mehr dar. Zahlreiche Juden aus Osteuropa und Südrussland verließen Europa. Theodor Herzl äusserte den Zionismus und verurteilte die Aufklärung: “Wollen wir warten, bis sich der Sinn auch der mittleren Menschen zur Milde abklärt, die Lessing hatte, als er Nathan den Weisen schrieb, so könnte darüber unser Leben und das unserer Söhne, Enkel, Urenkel vergehen.” Die Aufklärungszeit war im Begriff zu enden.

Nach einem Vierteljahrhundert nach der ersten Auflage (1876) von “Aus Halb-Asien” schrieb Franzos: “Es (der Gang der Kulturentwicklung des Ostens) ist ein anderer, als ich ihn für wünschenswert und den Völkern Halb-Asiens erspießlich bezeichnet habe. Die Ideen, in deren Dienst sich dieses Buch stellt, haben seit 1876 im Osten fast nur Niederlagen und sehr wenige Siege zu verzeichnen gehabt.” Dieses letzte Vierteljahrhundert des 19. Jahrhunderts war die Zeit des Nationalismus, wo Tschechen in Böhmen, Polen und Ruthenen in Galizien die politische und kulturelle Selbständigkeit gegen die Monarchie forderten und den Entwurf der Post-

Monarchie zu zeichnen begannen. Franzos deklarierte trotz der Niederlage seiner Ideen nach einem Vierteljahrhundert noch immer die alten aussichtslosen Aufklärungsideen, die doch seine eigene Identität bildeten. Im Jahr 1933 entstand im Westen die Barbarei (NS), stürmte nach Osten und vernichtete ganz Osteuropa, was Franzos' Schema "europäische Bildung und asiatische Barbarei, europäisches Vorwärtsstreben und asiatische Indolenz, europäische Humanität und so wilder, so grausamer Zwist der Nationen und Glaubensgenossenschaften" von Grund aus umwälzte. Nach dem zweiten Weltkrieg kam sein Name nicht wieder auf.

The Enlightenment and "Halb-Asien"

— An essay on Karl Emil Franzos (1)

Yutaka IKARI

Key words: Karl Emil Franzos, "Halb-Asien", Enlightenment, Jews, Galicia